



# 松姫様の生涯

武田氏滅亡を越えて

# 【八王子の戦国時代】

## ◎ 大石氏の時代

- 関東管領上杉氏の重鎮、武蔵守護代大石氏は埼玉県南部、北多摩から八王子市北部にかけて勢力を有していたが、鎌倉時代から長くこの地域を支配した長井氏の滅亡後、八王子南部、相模方面を領地とした
- 高月城、滝山城（続名城百選、大永元年（1521）築城と伝わる）、浄福寺城など八王子北西部に残る大石氏の足跡
- 天文年間（1532～1555）には山内上杉氏を離れて北条氏の参加となった

## ◎ 北条氏照(1542～1590)の時代

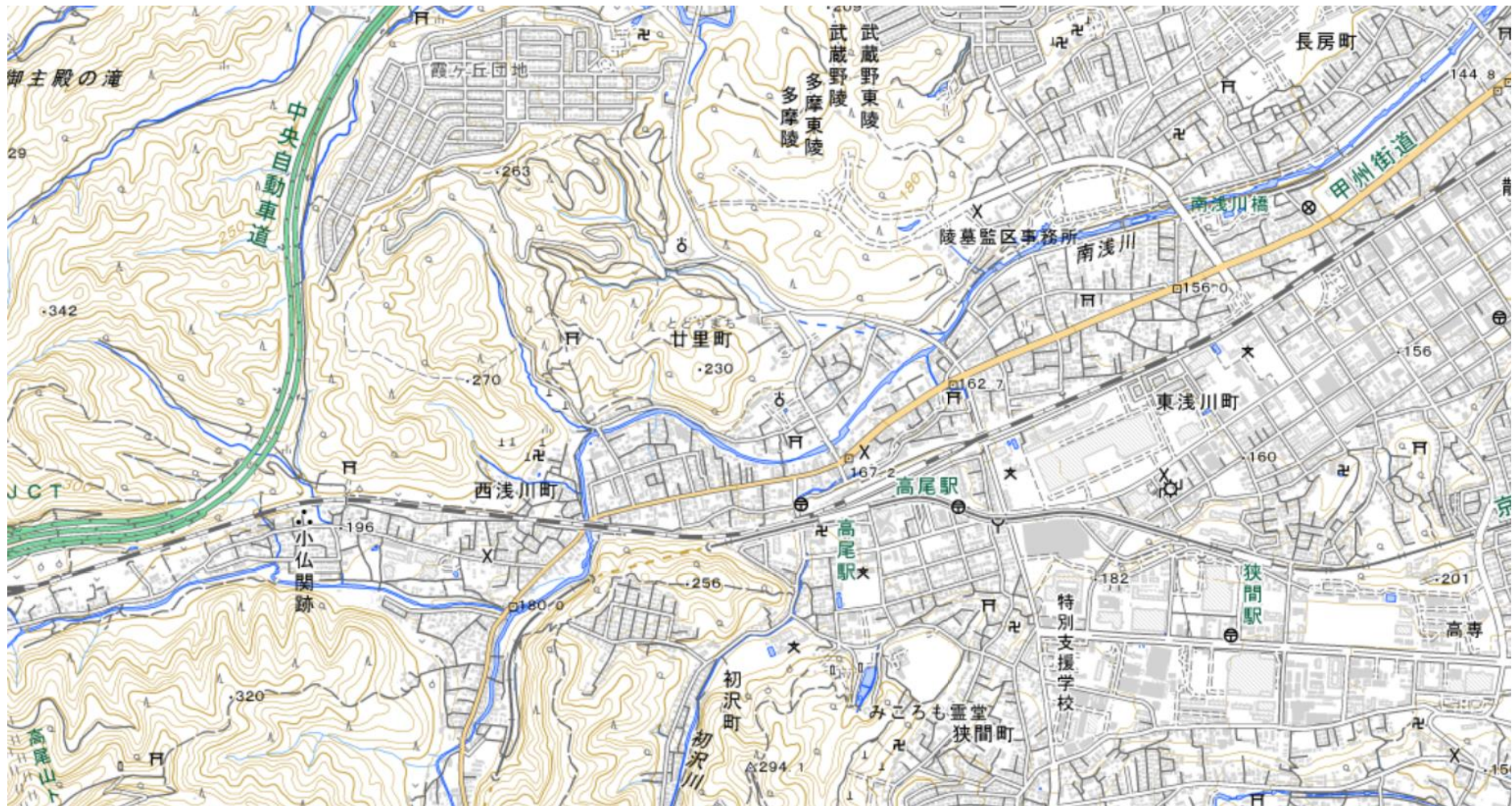
- 北条家三代北条氏康の三男、藤菊丸は弘治元年（1555年）11月に下総葛西城で行われた古河公方足利義氏の元服式に、兄弟で唯一父と一緒に参加
- 大石氏との養子縁組と家督相続
- 永禄十一年（1568）正式に大石氏から北条氏に名を戻した
- 武田信玄による侵略（永禄十二年（1569）廿里合戦、滝山城包囲戦）
- 北条家四代北条氏政を補佐し、北条御一家衆の重鎮として関東広域の軍事、支配、古河公方家や諸大名との外交で活躍
- 滝山城から八王子城への移転
- 八王子城の落城（前田利家、上杉景勝、真田昌幸の北国勢）、小田原開城と北条氏政、氏照の切腹、徳川家の関東転封

# 【小山田信茂公と北条氏照】

## 【廿里合戦】

- 永禄十二年（1569）に北条氏政との同盟が破れた武田信玄の軍勢は、小田原城を目指して碓氷峠を越えて上野から関東に侵入しました。
- 武田勢は青梅方面から滝山城に迫り拝島に陣を布く構えをみせました。この時武田信玄の本隊と合流するため小仏峠を越えてきた小山田信茂率いる約1100の武田勢が小仏峠を越えた、との情報があり迎え撃つために至急横地監物、近藤出羽、中山勘解由らが率いる北条勢約2300が滝山城から出撃しました。しかし、先に陣を構えていた小山田茂信を主将とする武田勢が勝利をおさめ北条勢は滝山城に撤退しました。この時武田勢は251人を打ち取ったと伝わります。
- その後に小山田隊は本隊と合流 滝山城の包囲戦が始まりましたが、城主北条氏照は城を死守、二日間の攻城戦の後に武田勢は南に転じて小田原に向かいましたが滝山勢は即座に追撃することができませんでした。小田原城を包囲して城下を荒らした後、甲州への帰路に就いた信玄を追った氏照たちでしたが、三増峠の合戦で再び敗北、信玄の帰国を許しました。その後天正年間（1578~）に北条氏照は滝山城から小仏峠に近い深沢山に築いた八王子城に移ります。

# 【廿里合戦の地】



# 【江戸時代の八王子「町」の始まり】

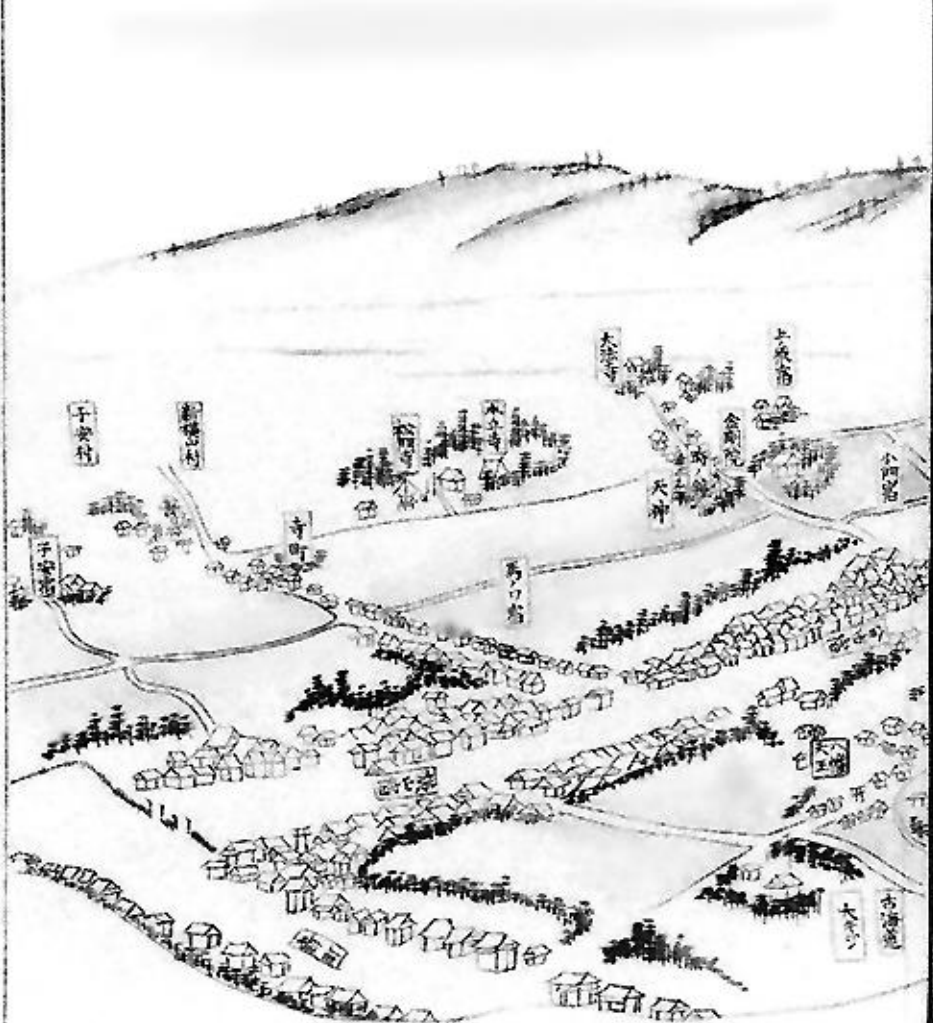
## ◎ 徳川家康の関東領有時代

- 大久保長安と甲州小人頭九家と小人衆246人の進駐
- 大久保長安が作った町、新市街地形成（石見土手、町割、市立て、道路整備）街並み一里
- 地域名を八王子に定めた 小人頭から千人同心へ、北条遺臣の定着（宿越）、六斎市、関東十八代官の拠点

## ◎ 関ヶ原後の八王子

- 大久保長安の全国での活躍（美濃、岐阜、奈良、石見、銀山、佐渡金山、伊豆金山）
- 武田と北条の旧臣による地域の形成（八幡八雲神社）
- 大久保長安事件と八王子(文書の隠滅?)

武蔵名勝図会 植田孟縉著  
(文政六年1823)



八王子  
十五ヶ宿



# 【武田信玄の娘 松姫 1】

- 永禄四年(1561)生 武田信玄の四女または五女と伝わる
- 母は武田信玄の側室油川御寮人(信玄の叔母の娘)
- 同母の兄妹に高遠城主仁科盛信、菊姫(上杉景勝妻)など
- 富士浅間大菩薩願文

右の意趣は、徳栄軒信玄の息女、当病平愈息災延命のとき  
んば

- 一、来る六月、息女富士峯参詣の事
- 一、土峯飯山の室にひつ葛衆を請じ、五部の大乘経読誦の事
- 一、神馬三疋献納の事

右三カ条の旨、相違なく社納せしむべきものなり

永禄八年(1565)乙丑五月吉日 信玄敬白

- 甲陽軍鑑に「是れは五ツに成り給う織田城介殿へ御約束の御料人御煩の時、かくの如し」とある



浅間宮社  
祭神三座  
天津彦彦火瓊瓊杵尊  
大屋萬洋美命  
木花間邪槌命

當社大鳥居  
高五丈八寸五分  
大鳥居一丈六寸  
唯一本木十寸  
御額大既五丈八寸  
六尺楠板三國景山  
御筆則三國景山  
首上水石大寺二間  
二尺四寸七寸石水  
屋之柱石也石櫓天三尺  
一丈六寸之石以二枚為浮櫓  
木通石燈籠九百五十對  
余石燈籠也

武田信玄直筆願文

奉獻 富士淺間大菩薩寶前願  
書之  
右意趣者  
德榮軒信玄具女當 平愈息  
延命則  
一來育息女當奉參詣之  
一於古奉中山宣請之節又  
承神請願  
一神為是奉獻之  
右意趣之無相違可令社務者之  
永保八月五日信玄 敬  
用

富士淺間神社



## 【武田信玄の娘 松姫 2】

- 織田と武田の政略結婚 松姫様以前に勝頼の正室には織田信長養女遠山氏娘（遠山夫人）を迎え、嫡子信勝が生まれる
- 永禄十年（1567）11月に勝頼正室は死去し、同年12月に7歳の松姫と信長の嫡男・織田奇妙丸(信忠)（11歳）が婚約。後に勝頼は北条氏康六女を正室に迎え、「甲相同盟」を結ぶ
- 武田家で「信忠正室を預かる」として、新館御料人と呼ばれた
- 元亀三年(1572)武田信玄西上、遠州三方ヶ原合戦で家康を破る、織田信長との同盟関係破綻により破談、松姫12歳（これ以前より徳川家康から信長に武田と手切れ（婚約破棄）するよう働きかけがあった）
- 天正元年(1573)武田信玄伊奈駒場にて病没 享年五十三歳
- 武田信玄は遺言で勝頼は信勝成人までの後見と位置付けた
- 家督は異母兄の四男武田勝頼が相続、仁科盛信の居城、高遠に移る(母の病没にともなって?)
- 当時の松姫様は「居止言行如孤孀者(行いや言葉は未亡人のようであった)」、他家への結婚を勧めても「不欲関人世之事(人の世の事に関わることを欲しない)」(信松尼百回会場記)として拒否し、父母の菩提を弔うのみであったといわれる
- 十八歳剃髪説

# 【家康の起請文】

徳川家康は松姫様と織田信忠の縁談をやめさせようとしていた。

敬白 起請文

右、こんど愚拙心腹の通り、権現堂をもって申し届け候ところ、御啐啄、本望に候事

一、 信玄え手切れ、家康深く存じ詰め候間、少しも表裏、打抜け、相違の儀、あるまじく候事。

一、 信長・輝虎御入魂候ように、涯分意見せしむべく候。 **甲尾縁談の儀も事切れ候ように**、風諫せしむべき候事。

若し此旨偽るにおいては

上は梵天帝釈、下は四大天王、惣じて、日本国中の大小の神祇、別して伊豆、箱根両所の権現、三島大明神、八幡大菩薩、天満大自在天神の御罰を蒙るべきものなり。仍って件のごとし

十月八日

家康（花押）

上相殿

# 【武田信玄の子供たち】

- 長男 義信 謀反の疑いで廃跡後自殺
  - 二男 竜芳 盲目のため出家、信長侵攻時に自殺⇒現在の武田宗家に繋がる
  - 三男 信之 早世
  - 四男 諏訪氏を継ぎ、はじめは諏訪勝頼、義信死後に復姓し武田勝頼として家督を継ぐ、正室ははじめ織田信長の養女、継室は北条氏政の娘
  - 五男 信州の名族仁科氏を継ぐ、仁科盛信
  - 六男 信貞 織田家の侵略時に死去（自殺）
  - 七男 信清 上杉景勝のもとに逃亡、以後は上杉家の家臣として続く
- 
- 長女 黄梅院 北条氏政正室、信玄の今川領侵攻により離婚？
  - 二女 見性院 穴山梅雪正室（織田侵攻時に反逆）
  - 三女 真竜院 木曾義昌正室（織田侵攻時に反逆）
  - 四女 松姫様 織田信忠と婚約、武田滅亡時八王子に逃亡
  - 五女 菊姫 上杉景勝正室

※生誕順などには異説あり

北



三ノ丸  
進徳館  
大手口 現在位置

武家屋敷

搦手

二ノ丸

勘助曲輪

本丸

南曲輪

法幢院曲輪

笹曲輪

三峰川

南

信州高遠城図

## 【仁科盛信の奮戦と高遠城】

- 天正十年（1582）二月下旬、兵三千で籠もる高遠城は信長の嫡男・織田信忠率いる五万の大軍が包囲
- 信忠は盛信に降伏を勧告したが、盛信は勧告を拒否。降伏の使いに来た僧侶の耳をそぎ落として追い払った
- 高遠城は3月2日早暁から織田軍の猛攻に晒され、妻と約500名余りの家臣も共に討ち死にして高遠城は陥落、盛信享年二十六歳
- 織田勢の侵攻に伴い、武田勢がことごとく逃亡する中で徹底抗戦を貫き、武田武士の力を見せつけた

※この時城内にいた保科正直（後に高遠城を奪還する）は、織田と通じて脱出に成功したと伝わるが、織田に与することなくそのまま信州に逃亡した

# 【武田家の滅亡】

- 信玄死後に勝頼は北条と再び同盟を結び氏政の娘と結婚した
- 勝頼は越後上杉家の跡目争い介入したが、北条からの養子景虎を見捨てて景勝方についたため、北条氏と敵対したが夫人は帰らなかった。
- 長篠合戦、高天神城落城など武田と織田・徳川との戦局は悪化
- 天正八年から九年にかけて織田との和睦交渉
- 天正十年（1582）1月、織田・徳川連合軍による甲州攻め始まる
- 木曾、穴山をはじめとする国人の裏切りや逃亡が続き、高遠城を除いてほとんど合戦らしいものもなく、織田勢が次々と拠点制圧。万を超える軍勢を率いていた勝頼が甲府の新府城から脱出した時に従うものは数百騎であったと伝わる。
- 勝頼一行は岩殿山城を目指したと伝わるが、行く先を変更、天目山へ向かうも田野で織田勢に取り囲まれた。一行はさらに少なくなっていてこの時に自害、討ち死にした武者39名、侍女17名の名が伝わっている。勝頼は妻の北条夫人、長男信勝とともに自刃(三月十一日)、戦国大名としての武田家滅亡
- 甲陽軍鑑によれば松姫はここから石黒八兵衛、何々阿弥に導かれて逃げたという事になっている？

# 【織田信長と武田勝頼の和睦交渉】

◎武田勝頼と織田信長の間で天正八年から九年にかけて和睦交渉が行われていた

- 美濃の遠山氏の養子となっていた信長の五男御坊丸は、元龜三年（1572）信玄の美濃侵攻により遠山氏が武田氏に服属し、甲府に送られ、織田と武田の手切れ後も武田家中で暮らしていた
- 翌元龜四年の信玄死後も松姫の婚約解消の手続きをした記録はない
- 長篠での敗戦、高天神城落城など旗色が悪くなった中で武田勝頼は佐竹氏（関東における織田信長の同盟者、常陸の土着大名、江戸時代には秋田藩主）臨濟宗僧侶等を仲介にした和睦交渉を試みたといわれる
- 和睦の条件はわかっていない(松姫様の婚約は?)
- はじめは織田信長(甲江予和)、次にすでに家督を相続していた信忠(甲濃和親)と交渉
- 佐竹氏を通じて御坊丸を返したが、和睦交渉は決裂して御坊丸は織田家にとどまり元服して「織田信房」となる
- 信房は兄信忠とともに甲斐侵攻に参加、同年6月本能寺の変で自害
- 松姫の婚約者織田信忠は家臣の娘を娶っていて嫡男の三法師がいたが、信忠の正式な妻ではなかったといわれる

# 【逃避行】

- 松姫は四歳になる督姫とともに高遠城から新府(韮崎)へ行ったか
- 「信長公記」に勝頼一行とともに新府城を落去した女性たちの中に「信玄末の娘」いう記載があり、これが松姫のことといわれている
- 督姫のほか皆3～4歳であったと伝わる武田勝頼の娘貞姫、武田家の重臣小山田信茂の娘香具姫を連れて二女と警固の武士たちを合わせて一行約二十名は海島寺へ、その後の足取りは不明
- 塩山から大菩薩峠を越えて小菅村、尾根伝いに檜原村、直接案下村へなど諸説はあるものの八王子に入ったルートは明らかではない
- 八王子の広園寺、広慶寺と塩山向岳寺を結ぶ修行僧の道(小山田氏の領地を通る)
- 小山田氏は「国境の領主」として北条氏と一定の交流があった可能性
- 甲陽軍鑑では、田野まで行を共にしていたことになっているが？
- 三月末、松姫一行は案下峠(和田峠)を越えて、武蔵国多摩郡恩方村金照庵(現・八王子市上恩方町恩方第二小学校付近, 当時は広慶寺の隠居寺)に入る
- 恩方村に渡辺家での一行程の接待などの松姫伝承が残る





八王子市内から望む陣馬山

八王子市上恩方町の松姫様の碑

# 【松姫様と八王子】

- 松姫にかかわる文書記録はほとんど残っていない
- 甲州での武田残党狩りをどうやって逃れたのか
- 勝頼の夫人の実家を頼って落ち延びた？北条家にとって松姫一行を匿うことのメリットは無く危険のみ多い存在(本能寺の変までは織田による追及の対象)
- 北条氏照の師、ト山俊悦和尚との出会い(二十二歳出家説)、若き日のト山和尚は甲斐で修行していた
- 心源院は八王子城の搦手でありながらなぜか落城時に焼失を免れている
- ト山和尚は遺戒で孤児、尼僧などを寺に入れてはいけないと戒めている
- ト山の伝記(ト山大和尚行実)の中に、心源院の僧侶の集会(冬結制)に女子が参加し北条氏照が感心した、という記載がある。ただし天正九年のこととしてある。また、法嗣(法を受け継いだ弟子)として信松尼の名がある。この行実(禅僧の伝記)はト山和尚十七回忌の寛永十九年(1642)に書かれたもので、信長公記、甲陽軍鑑に次いで松姫様について書かれた古い文献と思われる。

## 【家康と松姫を繋いだ人々】

武田家恩顧であり、家康の最側近の二人

### ◎成瀬吉右衛門正一

家康が最も信頼した旗本の一人、若き日には武田信玄に仕えて川中島合戦などで武功をあげるも後に徳川に帰参、三方ヶ原では家康を側近として守り、武田家滅亡時には「成瀬吉右衛門を訪ねるように」という看板を出して武田旧臣を守った。甲府奉行として日下部定好とともに大久保長安の上司で後に同僚。家康関東入り後は武蔵鉢形城代を務め、晩年は伏見城留守居を務める。長男成瀬正成は犬山城主となるが、正一は大名となるのを固辞したと伝わる。

### ◎横田甚五郎尹松

高天神城の最後を見届けた武将、原虎胤の孫、甲斐に帰還して高天神城の落城を武田勝頼に報告。高天神城ではとらわれていた徳川家臣大河内源三郎を庇護したと伝わる。武田家滅亡後には徳川家に仕え、家康の側近として使番を務め、5000石の旗本となった。



心源院 本堂前の枝垂桜

戦国時代からの山門



松姫が400年以上前に訪れたとされる総門をくぐる座像(9日、八王子市の心源院で) 記事へ

# 【古記録に見る松姫像】

- つじつまの合わない伝説が多い
- 貞女松姫⇒松姫の甲府時代に織田以外との結婚を勧められ「婚約したままだから他に嫁ぐことはしない」という趣旨の言葉が残っている。武田家と織田家は松姫と信忠の婚約を正式には解消していない。しかし、結果として信忠は一族の「敵（かたき）」となった
- 織田信忠への「純愛」⇒江戸時代の貞女のイメージから近代になって言われるようになったか？
- 徳川の家臣による天正十年からの貞姫養育⇒徳川家康が貞姫を預かり家臣の高力正長の元で育成した、という言い伝えがあるが八王子にはそのような話は伝わっていないので真偽は不明。家康に存在を知らせたのはだれか？北条領の八王子からどうやって駿河に送り届けたのか？天正十八年以降のこととすれば十分あり得るか
- 寛政重収諸家譜1200巻：下嶋政茂 武田信玄及び勝頼に仕へ、勝頼没落の後政茂信玄の女を携て、織田信忠が許に送らんと尾張國に至る、信忠害にあふてのち東照宮かの女をもつて大久保長安にあづけらる、政茂これに属して長安が許にいたり、彼家にありて死す云々⇒、時系列が合わない（家康の元に長安が仕えた記録は天正十二年以前にはない、本能寺の変の6月2日から10月まで、家康は旧武田領を巡って北条氏と抗争（天正壬午の乱）し和睦は年末であった、このような戦乱の中をどうやって旅をしたのか等々）



八王子城御主殿虎口



御主殿後から発掘された  
ベネチアンガラスの壺



御主殿庭園  
遺構



うっちい

# 八王子城鳥瞰図

大天主

本丸

小宮曲輪

八王子神社

井戸

松木曲輪

慰霊碑

金子丸

根古屋

管理棟

観音堂

御主殿

城山川

御主殿の滝

曳橋

太鼓曲輪



北条氏照印判「如意成就」



# 【八王子城の落城】

- 天正十年（1582）天正壬午の乱勃発 本能寺の変後に甲斐国衆による国主川尻秀隆殺害、北条氏による滝川一益撃退などにより空白化した旧武田領を巡って、周辺の大名である徳川家康・北条氏直・上杉景勝が争った結果、甲州は徳川家へ
- 徳川家と北条家は同盟を結んだが、天正十八年正月、北条家と豊臣政権の手切れによって秀吉の関東攻め。氏照は小田原城に籠城し、豊臣勢は小田原城を包囲して北条の関東支城を次々と攻略
- 天正十八年（1590）6月23日（新暦7月24日）北国軍と北条を裏切った大導寺勢等による八王子城攻め、精鋭15,000
- 城主北条氏照や精鋭は小田原へ行き、老臣、農兵、山伏など約3,000が籠ったが800人以上が討ち死
- 正面前田利家 搦手上杉景勝 真田昌幸（進軍遅れる）
- 上杉景勝は妹の夫、真田昌幸は武田信玄の小姓出身(当時の名は武藤喜兵衛、後に武田軍で足軽大将を務める)
- 御主澱炎上、女性達は自刃し滝に身を投げたと伝わる

## ◎松姫様にとっての八王子城落城

かつては婚約者に実家を滅ぼされ、今度は八年間かばってくれた八王子城が縁者によって滅ぼされたことになった



# 【八王子町と信松尼】

- 天正十八年（1590）八月、徳川家康の関東入り、甲州は豊臣方が支配し慶長五年（1600）の関ヶ原の合戦まで続く
- 小田原城主大久保忠隣の寄子大久保十兵衛、代官として八王子付近を支配、配下の関東十八代官も甲州系が多い
- 武田家小人頭九名と小人衆246名八王子入り、のちの千人同心、千人頭は禄高五百石から二百五十石の旗本身分
- 北条浪人衆による町立（宿越）
- 横山村から八王子宿へ
- 旧八王子城下の社寺の移転と再興、新しい社寺の建立（北条氏と武田氏を結ぶ八幡八雲神社、富士森浅間神社）
- 大久保長安事件（慶長十八年（1613）五月）
- 御所水の草庵（代官所の南裏、甲州道に面し、町を見下ろす高台）にて元和二年(1616) 4月16日逝去
- 信松尼没後の同年冬に心源院七世仏国普照禅師卜山俊悦和尚により曹洞宗金竜山信松院を開山

# 【三人の姫君たち】

松姫が連れてきた三人の少女は皆、武田家滅亡の時に  
両親を失っている

・督姫（父は仁科盛信）

両親は高遠城で戦死、八王子の時宗法連寺にて得度、  
元横山村・大義寺西隣り玉田院に住した。法名 生式  
慶長十三年7月29日、29歳で亡くなった。その後玉田  
院は廃寺となっていたが元禄期の信松尼百回忌の時。  
仁科盛信子孫の資実が極楽寺に改葬。川口の法蓮寺に  
位牌がある。

・貞姫（父は武田勝頼）

両親は田野（天目山）で自害、慶長年間に足利氏諸流  
の宮原義久に嫁ぐ。夫義久は寛永7年（1630）死去、  
貞姫は万治二年（1659）享年81歳。

・香具姫（父は小山田信茂）

信茂は降伏したが織田信忠によって一族もろとも成敗  
される。香具姫（天光院殿）は信茂娘と教来石左近大  
夫の間に生まれ、後に信茂の養女となったと伝わる。

磐城平藩主の内藤忠興（ただおき）側室または後室。  
夫は12歳年下。香具姫41歳の時の男子、義概（元和  
五年（1619）生まれ）が嫡男として内藤家を継ぐ。  
亡くなったのは寛文十三年（1673）享年95歳。



玉田院墓（極楽寺）

# 【武田一族の衰亡】

- 河内源氏の子孫であり、平安時代の甲斐守護に始まる武田氏は治承寿永の乱(源平合戦)で活躍した。その後も有力守護大名として鎌倉時代から室町時代にかけて甲斐を中心に広域に勢力を広げた武田氏は戦国時代の末期に衰亡した。

## • 安芸武田氏

安芸武田氏は甲斐武田氏5代武田信光が承久3年（1221）に起こった承久の乱の戦功によって鎌倉幕府より安芸守護に任じられたことから始まる。安芸武田氏9代武田信実の時代、**天文10年（1541年）に大内氏の命を受けた毛利元就によって滅亡**した。

## • 若狭武田氏

安芸武田氏4代武田信繁の嫡男である武田信栄が1440年（永享12年）に室町幕府より若狭守護職を任命された。内紛や越前朝倉氏の侵攻により衰退し、本能寺の変では、旧領回復を狙って**明智光秀に加担するも、羽柴秀吉によって天正十年（1582）に滅亡**

## • 上総武田氏

甲斐守護武田信満の子、古河公方足利成氏に仕えた。康正2年（1456年）頃に成氏の命を受けて当時上杉氏が守護を務めていた上総を奪取し、長祿2年（1458年）頃に庁南城、真里谷城を築き、それぞれ庁南武田氏、真里谷武田氏と呼ばれた。**後に公方家の内紛、里見氏と北条氏の争いにまきこまれて共に衰亡し、最後に残った庁南武田氏は秀吉の関東攻めにより天正十八年（1590）滅亡**

## • 穴山武田氏

甲斐武田氏の御一門衆、五代目の信君（梅雪）は甲斐滅亡時には家康に加担したが、本能寺の変後に家康とともに京都から脱出時に落武者狩りで横死、嫡男勝千代は家康に取り立てられて水戸藩を興すも天正15年（1587）疱瘡により死去、享年16。嗣子が無かったため、いったん断絶した。家康はその後、梅雪の養女であった側室下山殿の子で5男の信吉に武田（穴山）家の名跡を継がせたが**慶長8年（1603年）21歳で死去、嫡男もなく、穴山武田家は再び断絶**し、水戸藩は徳川家のものとなった。その他甲斐武田の御一門衆は織田信長・信忠の侵略時にほとんどが命を失っている。

# 【香具姫が守った武田宗家 1】

## 大島への流刑

- 天正十年（1582）の武田家の滅亡時、武田信玄二男竜芳は自殺、その長男信道（天正二年（1574）～寛永二十年（1643）は信濃国安曇郡犬飼村へ逃れ身を潜めていた。
- 本能寺の変の後、北条氏と徳川氏が争った天正壬午の乱を経て甲斐は徳川氏の領地となった。信道は徳川家康に御目見えし、顕了道快と名乗り甲斐長延寺二世住職となる。
- 信道は武田遺臣である大久保長安の庇護を受けていたが、慶長十八年（1613）の大久保長安事件に連座し、徳川氏に無断で武田氏再興を図った疑い（孫氏の旗の保管など）で元和元年（1615）に長男信正と供に伊豆大島に配流、寛永20年（1643）同地で没した。

# 【香具姫が守った武田宗家2】

## 武田家の再興

- 寛文三年（1663）3月、信正は徳川家光の十三回忌に赦免され48年ぶりに江戸に戻った。そして内藤忠興に迎えられて内藤家の客分となり、忠興の娘（母は香具姫）の婿となったといわれる（孫娘説もあり）
- 信正の一子信興出生の翌年、香具姫は95歳の天寿を全うした。後に信興は六川衆の出身である幕府側用人柳沢吉保の庇護を受け、元禄十四年（1701）五代将軍綱吉に御目見えして武田氏滅亡から119年、信正帰島から38年目に武田家は高家旗本に列せられた
- 武田二十四将の一人、小山田信茂であったが、竜芳系の武田家はその娘によって守り抜かれ、武田氏の嫡流として今日に続いている

※大久保長安の庇護を受けていた信松尼、香具姫は同じく長安の庇護下にあった信道、信正と面識があったのではないかと思われる

# 貞姫が嫁いだ宮原家—武田女系と関東公方

- 足利尊氏の四男で鎌倉に下って関東管領（後に関東公方）となった足利基氏の後裔である古河公方足利高基の二男・晴直は、関東管領山内上杉憲房の養嗣子となって、上杉憲寛を名乗ったが、内紛によって憲房の実子憲政に家督を奪われた
- 上杉憲政は北条に敗れて越後に逃れ、家督を長尾景虎（上杉謙信）に譲ったが、謙信死後の「御館の乱」で敗死
- 憲寛は足利家に復姓したものの、実家の古河公方家を継いだ兄の晴氏との関係が悪く、上総武田信政の庇護を受けて現在の市原市宮原に居を構えて「宮原御所」と呼ばれ、長男義勝には信政の娘を迎えたものの、その後上総武田家は衰退して武家としては絶えている
- 豊臣秀吉の関東攻めの時には公方家とともに宮原家も秀吉に従い存続、三代目の義照は、家康に御目見えして天正十八年（1590）より、1040石を与えられて諸役免除を申し渡され、天正十九年（1591）に足利家の祖先の地である下野国足利郡駒場村に居所を移した。
- 義照は慶長5年（1600年）、関ヶ原の戦いに徳川秀忠に従い参加したものの慶長7年（1602）に27歳で死去、弟の義久が家を継いだ。
- 宮原義久は、家康から武田勝頼の娘・貞との結婚と「当主および嫡子のみが宮原姓を称し、分家は穴山姓を称すること」を命じられたと伝わる。宮原義久は母と妻が武田家の出身という事である
- 宮原家は足利市に今も健在

初代室町幕府將軍  
足利尊氏

初代關東公方  
四男 基氏

甲斐武田氏初代  
信義

十五代 義昭

七代  
高基

四男晴直  
山内上杉家に養子に行  
って上杉憲寛となつた  
が実子憲政との家督争  
いに敗れて復姓し真里  
谷武田氏の領地上総国  
宮原に隠棲、子孫は在  
所である宮原を姓とし  
た

十一代 信満

上総武田氏  
初代 信長



喜連川家と  
して存続

宍南氏初代  
信高

真里谷氏初代  
信興



六代 信応

五代、七代 信隆



十六代 晴信 (信玄)

妻女

二代  
宮原義勝

竜芳

十七代  
勝頼

貞姫

四代 義久  
義照が子供の  
無いままに没  
したので弟が  
家督を相続

三代 義照秀吉  
、家康に拝謁し  
1000石の旗本と  
なる。家康の命  
で上総から足利  
氏の出身地下野  
(栃木県)へ転  
封

十九代信  
政  
香具姫の支  
援により以  
後武田宗家  
を継ぐ

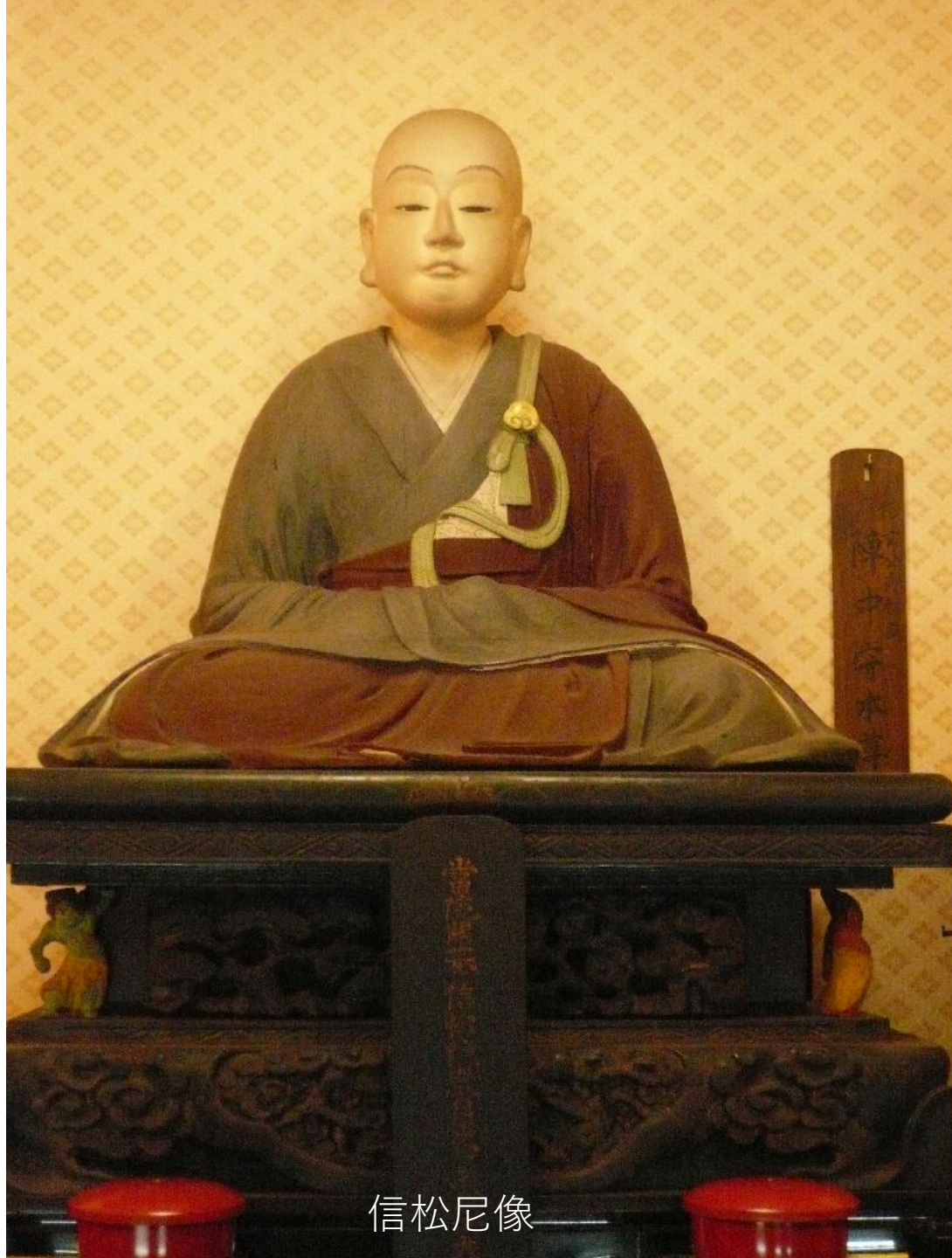
高家旗本宮原氏  
として存続、現  
在に至る



# 【貞姫と宮原家と北条氏照】

- 上杉氏を越後に追いやり、関東最大の有力な大名となった北条氏は、衰退した古河公方家から「関東管領」に任ぜられ、江ノ島、品川など各地の公方領の管理などを行うこととなった。
- 北条氏政の弟氏照は当時は当主の氏政に次ぐ有力者であり、関東公方家との「取次（外交担当の主管）」を務めていた。
- 古河公方家の庶流（分家）という位置づけである宮原家は、上総の領地で公方家と同じく北条氏の庇護を受けていたのではないか
- 関東に唯一残った「足利家と武田家の末裔」に勝頼の娘が嫁いだことにより、宮原家は足利家の子孫であるとともに、武田の血を二代にわたって女系から濃厚に受け継いだことになる。
- 宮原家が貞姫の降嫁先となる以前、北条氏没落後の氏照家臣の中山照守、中山信義、間宮綱信などは徳川家の旗本となっていた。彼らは職務上、上総の動向、古河公方家の内情などに通じていたと思われる。家康が「分家は穴山を名乗るよう命じた」という事も、宮原家に武田の血が濃いことを知っていたからではないだろうか。
- 宮原家は宝永六年(1709)より高家旗本に任ぜられ、最高位は従四位の下で大名並みである。宮原家から本家の古河公方家の後裔である喜連川家に養子として入った者もあり、名家として知られていた





信松尼像



信松尼墓所

## 【木製軍船ひな形】 東京都指定有形文化財

小早川隆景が使用した軍船の模型と伝えられ、松姫同腹の兄、仁科五郎盛信の孫にあたる仁科資真が松姫の百回忌に寄託した。日本に唯一残る戦国時代の軍船模型。



墓所の柵に刻まれた千人頭の名前



軍船ひな形

## 富士森浅間神社



- 浅間神社（富士塚、富士森）

祭神 木花咲耶姫 別名富士浅間様

- 創建 慶長年間、徳川幕府創立のころの関東総代官で当時今の小門町に住んでいた大久保石見守長安が駿河国浅間神社を分社し現在の地に高さ約二丈周囲六十間余の塚を築き頂上に浅間神社を勧請したのが起源といわれている

富士森公園にある浅間神社には「富士塚」が築かれています。塚の上にある石造の社は延享二年（1745）の日付があります。古記録によれば延享年間に木造の本殿をつくりかえたとあり、それ以前に築かれた塚であることは間違いないようです。

23区内や多摩地域に残る「富士塚」は江戸時代後期に盛んになった富士講によって建てられたもので安永九年（1780）に高田籐四郎（日行）が江戸の高田に建てたものが最古であるとされています。この塚は富士講以前の富士塚として貴重であり、ここ富士森浅間神社の本殿となっています。

# 【武田家再興と見性院】

穴山梅雪は武田家の一族で信玄の二女を正室とした。武田勝頼を見限り、天正十年（1582）2月、誘いに応じ家康に従った。3月11日、勝頼は天目山で自刃。

家康と共に京・堺を視察中、6月初め、本能寺の変の報を聞き急遽帰国の途についたが、山城国宇治田原で野盗の襲撃を受け死亡。その後梅雪の子、勝千代は16歳で天然痘に罹り病死し穴山家は断絶、所領は没収された。梅雪夫人は仏門に入り、見性院と称した。

見性院はその後家康五男(母親は武田御一家衆の秋山氏出身の側室)万千代を養子にし、穴山家を継がせ、武田七郎信吉と武田姓を名乗らせた。信吉は常陸水戸15万石の城主となったが、慶長8年9月、21歳で急死、再び断絶。

その後は家康の庇護のもとに江戸城北の丸に屋敷と大牧村(現在の緑区)に采地を与えられた、墓所は埼玉県さいたま市緑区の清泰寺。



# 【信松尼と保科正之公】

- 徳川秀忠の妻は織田信長の妹のお市と浅井長政の方の娘でお江與の方(江いいわゆる浅井三姉妹の末(長姉は秀吉の側室淀君、次姉は豊臣政権、徳川政権でそれぞれ重きをなした京極高次の妻))
- 秀忠には正式の側室がいなかった(嫉妬伝説)
- お静の方(北条遺臣の娘で秀忠乳母の女中)に手がつき懐妊、老中土井利勝の配慮で見性院が預かり采地に匿ったか?
- 大宮の氷川神社旧社家岩井家に伝わる慶長十六年願文に「しんせうぜんに」とあり、八王子の信松尼の可能性が高い
- 文化十一年(1814年)に成立した甲斐国志に、信松尼による保科正之養育の記述がある。著者は甲府勤番の旗本松平定能。甲府勤番は江戸から甲府往復の途中で八王子を通過した。



目黒願成就院のお静地蔵

# お静の方願文

うやまつて申きくわんの事

南無ひかわ大めうしん當こくのちんしゆとして  
あとを此国にたれたまひ しゆしよう あまねくたすけた  
まふここにそれかしいやしきみとして  
大しゆの御をもひものとなり御たねをやとして  
當四五月のころりんけつたり しかれとも  
御たいしつとの御こゝろふかくゑいちうにおることを  
ゑす今しんしようせんのにいたわりによつてみを  
このほとりにしのふ それかしまつたくいやしき  
身にしてありかたき御てうあいをかうむる神はつとして  
かゝる御たねをみこもりなから住所にさまよふ  
神めいまことあらはそれかしたいないの  
御たね御なんしにしてあん産守こしたまひ  
ふたりとも生をまつとふし御うんをひらく  
事をえ大きくわんしやうしゆなさしめたまはは  
しんくわんのことかならすたかひたてまつりましく候なり

けいてう十六 二月

志津

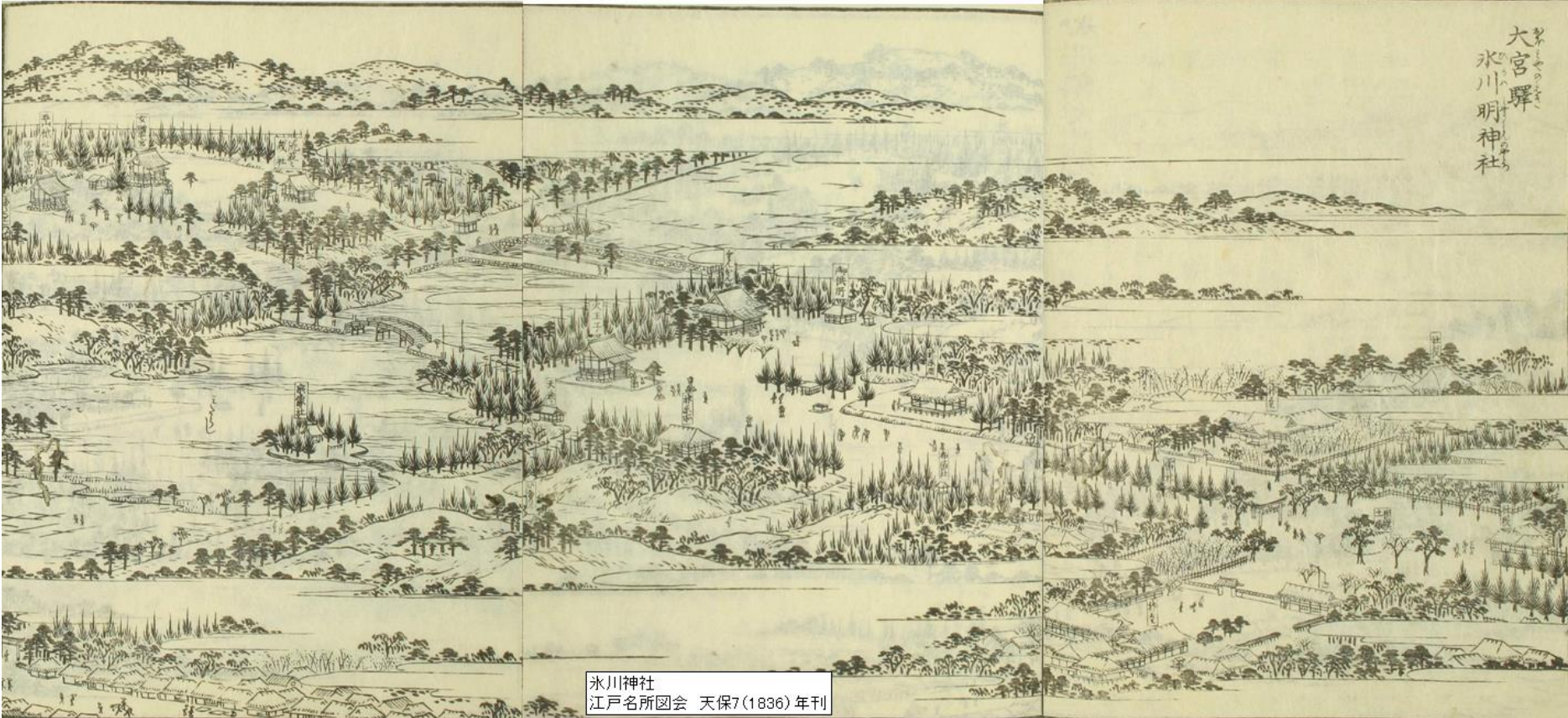
敬って申す祈願の事

南無氷川大明神 当国の鎮守として  
迹を此国に垂れ給ひ 衆生を遍く助け  
給ふ ここに某賤しき身として  
太守の御想い者となり 御胤を宿して  
當四五月の頃臨月たり 然れども  
御台嫉妬の御心深く 営中に居る事を  
得ず 今信松禅尼の勞わりによって 身を  
この辺に忍ぶ 某全く賤しき  
身にして 有難き御寵愛を被る神  
罰として かかる御胤を身籠りながら  
住む所に彷徨ふ  
神明真あらば 某胎内の  
御胤御男子にして 安産守護し給ひ  
二人とも生を全ふし 御運を開く  
事を得 大願成就なさしめ給はば  
心願の事 必ず違ひ奉りまじく候なり

慶長十六 二月

志津

# 武蔵一ノ宮 氷川神社



氷川神社  
江戸名所図会 天保7(1836)年刊

# 松姫様の旅の終わり

- 慶長十六年（1611）、幸松丸、後の会津松平藩始祖保科正之公出生
- 幸松と名付け見性院が養育、後に元和三（1617）年11月8日、高遠に赴き城主保科正光の養子となる
- 高遠から始まった松姫様の逃避行、そして保科正光の養父正直は盛信の副将。正光も松姫様と同じく新府城から辛くも脱出した一人であった。生涯の最後に守った幼子はその高遠に還った。
- 正之公は高遠藩3万石を継ぎ、寛永十三年（1636）7月21日、出羽国最上（山形市）20万石に転封、寛永二十年7月4日（1643）には会津23万石に転封、江戸幕府第三代将軍徳川家光と対面して異母弟として認められ、家光と4代将軍家綱を輔佐し、幕閣に重きをなした





# 【松姫様縁故の人々のまとめ】

◎貞姫の子 晴克は慶長11年（1606）に誕生、督姫は慶長十三年（1609）に死去、信松尼は元和二年（1616）4月16日に亡くなられたが、翌元和三年に幸松丸は高遠に養子に行き、香具姫に元和五年（1619）内藤家の嫡子義概が生まれた。

- 戦国時代末期、各地の分家までが滅びた武田家の末裔のなかで、貞姫の婚姻で勝頼の子孫が残り、上総と甲斐の武田の血が再び統合された
- 香具姫は内藤家に嫁いで子孫と長命に恵まれ、武田宗家の存続に力を尽くし、父小山田信茂の無念を雪いだ
- 最後に守った子供の保科正之公は武田縁故の大名の養子となつて、四代将軍徳川家綱を後見し、殉死の禁止、明暦の大火の復興時の民生重視、大名家の相続制度の緩和による社会の安定など江戸の平和に貢献した
- 松姫様を庇護したと伝わるト山和尚は北条氏照の信心が厚かったが、寺、信松尼没後の信松院の開山となり、晩年の一時を信松院で過ごした。

◎法名 「信松院月峰永琴大禅定尼」

# 強くなければ生きていけない、優しく くなければ生きる資格がない

- 生涯三度の落城と最も親しい人たちの争いや滅亡の渦中を生き抜く
- 「私が死を忍んで生きてきたのは女性や子供たちを世に生かすため」
- 嫁ぐことのなかった松姫様が子供たちを連れて八王子に来たことで、結果として武田家の名と血は現在に伝わった。
- 一族の滅亡と絶望を越えて守り抜いた子供たちに希望を託し、人としての普遍的な価値観にまで到達した戦国時代に類のない生涯といえる
- 多くの人々が参加した百回忌

尚能知報本而况衣冠禮義之士哉請師通告  
裔族餘屬之家宜以忠孝激勸則自戾牧大夫  
士之間應募者必累至可以濟也乃為按譜籍  
書姓氏以與之於是一時欣然捐金助其祭者  
曰元老土屋相模守殿列侯松平甲斐守殿真  
田伊豆守殿內藤右京亮殿岡部義濃守殿保  
科兵部少輔殿大村伊勢守殿松平刑部少輔  
殿松平式部少輔殿米倉主計殿曰三枝攝津

守殿土屋山城守殿三枝丹波守殿橫田備中  
守殿曲淵信濃守殿柳澤備後守殿曲淵下野  
守殿小宮山丹後守殿曾根能登守殿及日向  
氏小濱氏多田氏小林氏諸星氏真野氏雨宮  
氏下嶋氏辻氏平岡氏小宮山氏望月氏中川  
氏三橋氏土屋氏鈴木氏空田氏山高氏曾根  
氏三枝氏內田氏後藤氏高尾氏跡部氏真田  
氏駒井氏秋山氏津金氏青木氏柳澤氏秋原

氏曾雌氏青沼氏玉虫氏初鹿野氏高林氏小  
幡氏岩出氏酒依氏今井氏櫻井氏田澤氏武  
川氏小菅氏小笠原氏加賀義氏下曾根氏小  
佐平氏渡邊氏森木氏富本卷氏近山氏屋代  
氏安田氏遠見氏河田氏青柳氏糟屋氏前嶋  
氏白須氏樋口氏神尾氏小倉氏西山氏鎮目  
氏田邊氏森氏小尾氏朝比奈氏飯室氏茅村  
氏岩間氏内藤氏大田氏大井氏向井氏永井

氏橫田氏岡部氏須田氏折井氏嶋田氏大塚

氏加藤氏其利氏早河氏小倉氏金丸氏岡田

氏馬場氏武川源助内藤修理亮裔孫僧覺源和尚櫻井

安藝守裔孫武田信冬武田信處武田信友油川信

貞等是皆裔屬親戚而八手亦十人衆及其部

卒千人亦各分月俸供佛餉二十餘石也且夫

松平筑後守殿特聞其義賜以金若干諸公之

重義報本若是而和尚之至誠亦能貫感奮發

# 信松尼百回忌に関わった諸侯

- 土屋相模守政直（常陸土浦藩主）

元老中 武田勝頼とともに討死にした土屋昌恒の曾孫

- 松平甲斐守（甲府藩主）

柳沢吉里。六川衆の出身で五代将軍綱吉の重臣だった父の吉保は武田家の高家旗本身分への昇格に向けて尽力した。

- 真田伊豆守幸道（松代藩主）

真田昌幸（真田信繁（幸村）の兄）の曾孫

- 内藤右京亮義概（磐城平藩主）

香具姫の子（父正興は真田幸道の後見人、叔母は保科正之の正室）

内藤家と保科家の繋がりには香具姫が作ったか？

- 岡部美濃守長泰（和泉岸和田藩） 武田家二十八将の一人の子孫

- 保科兵部少輔正賢（上総飯野藩主）

祖父正貞は、保科正直の弟で子供がいなかった高遠の保科家の養子となる予定であったが、将軍庶子の正之が養子となったため、保科家を離れた。後に会津に移った保科家が「松平」の姓を賜った後、あらためて興された保科家の三代目で正之から保科家代々伝来の文物を引き継いだ。